



米ロイヤル・カリビアン・クルーズが日本への寄港を目指す世界最大級のクルーズ船

米クルーズ大手

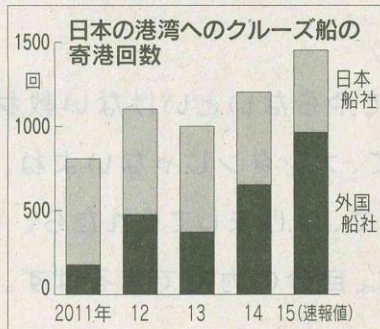
大型船、乗客最大5400人

日本—中国就航

18年訪日客取り込み

クルーズ船世界2位の米ロイヤル・カリビアン・クルーズは、世界最大級の客船を2018年に日本発着航路に投入する。熊本県の港を中心に寄港地を決めて中国などと結ぶ。乗船客のビザ免除措置の導入などもあって、アジアでは訪日クルーズが盛り上がりつつある。大型船で訪日客をさらに取り込みたいと考えて、地域経済などへの波及効果も見込めそうだ。

ロイヤル・カリビアンは15年からアジア最大級の総トン数16万ト級のクルーズ船を中国・上海に常駐させている。約4200人を運ぶことができて、日本を主な目的地として運航する。16年中には新たに同級のクルーズ船を配備する予定だ。同社を利用する訪日クルーズ客は「17年に15年比2・6倍の80万人に達する見込み」（アダム・ゴードステイン社長）としている。



寄港を始めるのは同社が18年に新たに日本への

保有する「オアシス級」と呼ぶ22万ト級のクルーズ船。全長は約360メートル、船内には緑化された公園や遊園地、大型劇場などを備える。約5400人を運ぶことができるという。

ロイヤル・カリビアンは同クラスのクルーズ船を2隻保有しており、16年に3隻目、18年に4隻目が引き渡される予定。このうちの1隻をシンガ

ポールや中国・上海、香港などアジアの拠点到に配置し、日本に寄港する航路に就航させる考えだ。同社によると日本には現在、オアシス級のクルーズ船が寄港できる港はない。このため外航クルーズ船の受け入れ拡大を目指している熊本県の八代港などを候補に、係船など技術的な課題の解決に向けた協議を始めた。

熊本県は18年にオアシス級の受け入れ体制を整える予定だ。日本は法務省が指定するクルーズ船の乗客に対するビザの免除制度を導入している。中国をはじめとするアジアからの訪日旅行の盛り上がりもあって、海外の大手クルーズ各社が日本への寄港回数を拡大している。グループ会社が豪華客船「クイーン・エリザベス」を運航する世界最大手の米カーニバル・コーポレーションもアジア事業を強化している。一度に大量の訪日客を運ぶクルーズ船の寄港増加は、消費拡大など地域経済にも好影響を与えそうだ。

経済波及効果、大きく

寄港先で多額の買い物

1回の寄港で数千人の訪日客が見込めるクルーズ船は経済への波及効果の面でも無視できない存在になりつつある。航空機を利用するよりも多くの商品を持ち帰れることもあり、乗客による買い物の消費額は大きい。クルーズ船の寄港が多い博多港がある福岡市によると、乗客1人の消費額が

10万円強に達した調査結果もあるという。現在の訪日旅行は東京や大阪、京都などを巡る定番ルートに集中しており、宿泊施設の不足が目立つ。訪日客の地方への分散が課題となるなか、各地の港を巡るクルーズ船は「地方への送客に大きな効果がある」（国土交通省）。2015年のクルーズ船の寄港回数（速報値）は1452回と前年より2割増えた。外国船社が大きく増えておりクルーズ船で入国した外国人も約112万人と14年の2・7倍になった。国が目指していた20年に100万人という目標は前倒しで達成され現在は新たな計画を策定中だ。経済効果を狙ってクルーズ船の誘致に力を入れる自治体などが一段と増えそうだ。